子規の画

夏目漱石

余は子規（しき）の描いた画（え）をたった一枚持っている。亡友の記念（かたみ）だと思って長い間それを袋の中に入れてしまっておいた。年数（ねんすう）の経（た）つに伴（つ）れて、ある時はまるで袋の所在を忘れて打ち過ぎる事も多かった。近頃ふと思い出して、ああしておいては転宅の際などにどこへ散逸するかも知れないから、今のうちに表具屋へやって懸物（かけもの）にでも仕立てさせようと云う気が起った。渋紙の袋を引き出して塵（ちり）を払（はた）いて中を検（しら）べると、画は元のまま湿（しめ）っぽく四折（よつおり）に畳んであった。画のほかに、無いと思った子規の手紙も幾通か出て来た。余はその中（うち）から子規が余に宛（あ）てて寄こした最後のものと、それから年

月の分らない短いものとを選び出して、その中間に例の画を挟(はさ)んで、三つを一纏(ひとまと)めに表装させた。

画は一輪花瓶(いちりんざし)に挿(さ)した東菊(あずまぎく)で、図柄(ずがら)としては極(きわ)めて単簡(たんかん)な者である。傍(わき)に「是(これ)は萎(しぼ)み掛(か)けた所と思い玉え。下手(まず)いのは病気の所為(せい)だと思い玉え。嘘(うそ)だと思わば肱(ひじ)を突いて描いて見玉え」という註釈が加えてあるところをもって見ると、自分でもそう旨(うま)いとは考えていなかったのだろう。子規がこの画を描いた時は、余はもう東京にはいなかった。彼はこの画に、東菊活(い)けて置きけり火の国に住みける君の帰り来るがねと云う一首の歌を添えて、熊本まで送って来たのである。

壁に懸（か）けて眺めて見るといかにも淋（さび）しい感じがする。色は花と茎と葉と硝子（ガラス）の瓶（びん）とを合せてわずかに三色（みいろ）しか使ってない。花は開いたのが一輪に蕾（つぼみ）が二つだけである。葉の数を勘定（かんじょう）して見たら、すべてでやっと九枚あった。それに周囲が白いのと、表装の絹地が寒い藍（あい）なので、どう眺めても冷たい心持が襲って来てならない。

　子規はこの簡単な草花を描くために、非常な努力を惜しまなかったように見える。わずか三茎（みくき）の花に、少くとも五六時間の手間（てま）をかけて、どこからどこまで丹念に塗り上げている。これほどの骨折は、ただに病中

の根気仕事としてよほどの決心を要するのみならず、いかにも無雑作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云っても、明かな矛盾である。思うに画と云う事に初心な彼は当時絵画における写生の必要を不折などから聞いて、それを一草一花の上にも実行しようと企てながら、彼が俳句の上ですでに悟入した同一方法を、この方面に向って適用する事を忘れたか、または適用する腕がなかったのであろう。

東菊によって代表された子規の画は、拙くてかつ真面目である。才を呵して直ちに章をなす彼の文筆が、絵の具皿に浸ると同時に、たちまち堅くなって、穂先

の運行がねっとり竦んでしまったのかと思うと、余は微笑を禁じ得ないのである。虚子が来てこの幅を見た時、正岡の絵は旨いじゃありませんかと云ったことがある。余はその時、だってあれだけの単純な平凡な特色を出すのに、あのくらい時間と労力を費さなければならなかったかと思うと、何だか正岡の頭と手が、いらざる働きを余儀なくされた観があるところに、隠し切れない拙が溢れていると思うと答えた。馬鹿律義なものに厭味も利いた風もありようはない。そこに重厚な好所があるとすれば、子規の画はまさに働きのない愚直ものの旨さである。けれども一線一画の瞬間作用

で、優に始末をつけられべき特長を、とっさに弁ずる手際がないために、やむをえず省略の捷径を棄てて、几帳面な塗抹主義を根気に実行したとすれば、拙の一字はどうしても免れがたい。

子規は人間として、また文学者として、最も「拙」の欠乏した男であった。永年彼と交際をしたどの月にも、どの日にも、余はいまだかって彼の拙を笑い得るの機会を捉え得た試がない。また彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さえもたなかった。彼の歿後ほとんど十年になろうとする今日、彼のわざわざ余のために描いた一輪の東菊の中に、確にこの一拙字を認める事の

できたのは、その結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余にとっては多大の興味がある。ただ画がいかにも淋しい。でき得るならば、子規にこの拙な所をもう少し雄大に発揮させて、淋しさの償(つぐない)としたかった。

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房
1988（昭和63）年7月26日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房
1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月にかけて刊行
入力：柴田卓治
校正：大野晋
ファイル作成：野口英司
1999年5月12日公開
1999年8月30日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。